

黄土高原に住む人びとは、先祖伝来の土地に住み着き、黙々と祖先からの農耕技術を受け継ぎ、世代を引き継ぎながら、この土地特有の文化を育んできたのです。天の神に順応して、季節ごとに自然の恵みが例年と同じようにもたらされることを祈りながら生きてきました。

このように祈り、恩恵を期待する文化では、文字による記録は生まれず、彼らの文化は、各世代から世代へ口で伝えて、心で受け継ぐ方式で引き継がれ、彼らの血潮の中に、細胞の片隅に生きていくのです。生活の厳しさや、苦しい体験で得たものが、潜在的な意識となり空中に希望の楼閣を描き出します。

冠婚葬祭・生殖崇拜は、家族の存続と繁栄を左右する行事です。神霊崇拜で、家族の平穏と安泰を祈り、病気・災害に見舞われないことを願います。竜王崇拜は、一年の天候安定・五穀豊穡への祈りです。更には、竈の神・土地の神を崇拜することで、各家庭の家畜類が増えてゆき、果実が実り、天候が穏やかであるようにと祈ります。

このような時、黄土高原の住民としての特性が剪紙・布堆画のモチーフとなります。製作者の経歴や経験の違いなどから、作り出された作品はそれぞれ異なっていますが、だからこそ民間伝統文化といわれ、いわゆる“無形文化遺産”と称されるものなのです。

高鳳蓮は、一般の人と比べて、より困難な人生を歩み、紆余曲折を経験しているのです。彼女が精神的な支えを必要とする時、彼女の眼前には、意識の中に潜在していた太古の、宗教的で伝説的な、言葉では言い表せない図柄が、より強く、突如浮かんでくるのでした。

高鳳蓮の作品には、古代の神々を想像させるような剪紙もあります。神の世界を垣間見るということは、過酷な生活を経験した人々のみが会得する、満ち足りた生活への渴望と幻覚ですが、高鳳蓮の想像力と創作技術があって初めて、私達にそれを感じさせてくれるのです。

高鳳蓮が素晴らしいのは、重苦しい精神的な重圧下でも、作品は開放的で、優しい、落ち着いた気分が満ち溢れていることです。

高鳳蓮も陝北の普通の女性であり、喜怒哀楽の情、様々な欲望も持ち合わせていますが、一方では、負けず嫌いで、何事にも毅然として立ち向かう、強い意思が彼女の生活全般を支えています。高鳳蓮は、農作業ばかりでなく家事万端、時間を無駄にせず、マントウを蒸している時にも同時に何か手仕事をしているといった風で、あちこちに目を配りながら家事を進めていきます。

ある日、高鳳蓮は家族のためにマントウを蒸かしていました。成形したマントウを蒸籠の上に乗せ、蒸気が上がるのを待つ間、物置から、内側にアルミ箔を張った西鳳酒（白酒）の箱を見つけて来ました。

箱を切り開いて平に伸ばし、ハサミで必要な形を切り出しました。その間に、蒸籠から蒸気が上がり、ふっくらと大きく膨らんだマントウが出来上がりました。そして、先ほど切り出したアルミ箔付き厚紙は、蒸し器の蓋の壊れたところを塞ぎ鍋の修理が終わりました。

こんな風に、高鳳蓮は待ち時間がある時は、必ず他のことをしています。決して無駄な時間は作りません。高鳳蓮は、やはり黄土高原陝北の典型的な女性の一人なのです。



畑に向かう高鳳蓮さん



惜しみなく剪紙の技術を披露し指導する



高家のリンゴは大きくて甘い



テレビ局が度々高鳳蓮の取材で訪問する

彼女の夫は、これまた典型的な陝北農民で、勤勉で農業一筋に打ち込んで来ましたが、そんな夫と共に、高鳳蓮も農業にいそしみます。彼女の自慢は、リンゴと葡萄です。彼らのリンゴは、近隣の農民が作るリンゴより大きく甘いと評判です。彼らは苗木から、いろいろ工夫をして丹精込めて育ててきました。

剪紙作家としての高鳳蓮は、今や押しも押されもしない第一人者です。彼女の名声を慕って、外国から訪ねて来る人や、芸術を勉強している学生たちがひきも切りません。そんな時、彼女は気軽に剪紙の技を披露し、学生たちにはその知識を惜しげもなく与えています。

メディアもまた、高鳳蓮を様々な切り口で人々に伝えようと、度々取材に来ます。そんな時、高鳳蓮は昔の苦しい生活を思い出しながら、それらの日々を、懐かしさを込めて、楽しそうに語るの

でした。

毎日の生活は、最近ますます快適になり、目の前に浮かんでくる昔の苦しい生活も、今の高鳳蓮にとっては、楽しい思い出です。

高鳳蓮が最も異彩を放つのは、紙の切れ端を使って動物や飾り物を剪る時です。紙きれの形に合わせて、気負うことなく、鋏の赴くまま、手の動くに任せて、勢いに乗じて、思いがけない形が切り出されます。これは、他の人にはまねのできない分野です。

高鳳蓮の住む白家台を訪問する時、私はいつも黄土高原でもより西安に近い、渭北地方に住む庫淑蘭老人のことを思い出していました。私は、この庫淑蘭のところへも何度か訪問したことがあり、彼女が制作する様子を親しく見せてもらったことがありました。庫淑蘭が剪紙を制作している時は、無我の境地に陥り、きらびやかな姿をした



高鳳蓮藝術館の入り口

剪紙の仙女が、彼女の頭の中から飢餓や苦痛、世の中のことを追い出してこの世の楽園に導いてくれたような気持になるようです。此の楽園で庫淑蘭は、世間一般の欲得を忘れ、社会生活上の悩みや困難から解放され、身も心も軽くなり、思いっきり歌を歌いたい気持ちになるそうです。こんな激しい快感は、同席する“剪紙仙女”信者の人々

にも伝わって行きました。

高鳳蓮が他の剪紙作家と違うところは、彼女には大きな夢とそれを実現する壮大な計画があったことです。彼女は、生きているうちに自分自身の芸術殿堂を建設し、自分の一生の作品を後世に残したいと考えました。これは庫淑蘭に啓発されたものでした。

庫淑蘭も、生前自分の作品を集めて“剪紙仙女”の殿堂を作りましたが、庫淑蘭が世を去ると、時間と共に、この殿堂も雲散霧消してしまっただけでした。これを見て、高鳳蓮は全財産をつぎ込んで、自分自身の手で“高鳳蓮藝術館”を建設し、終に夢を実現させました。

高鳳蓮は、他の人達と違って、人々が築いた富は、全て炎帝・黄帝の子孫、つまり中国人民の財産であり、ひいては陝北黄土高原の財産であると考え、自分の全財産を惜しげもなくつぎ込んだのでした。その内、人々は立派な碑を建てて中国芸術史上における高鳳蓮の足跡を記憶に留めるようになるでしょう。

(終わり)